



大本山永平寺



弥生の月(三朔)のこと

巷では、ぼちぼち春の便りが届く三月ですが、ここ永平寺は
 いまだ雪に覆われ、春の息吹さえまだ感じることができません。
 しかし、そうした中、元気のよい今年入山した新しい修行僧の
 声が山内に響き渡ります。新入山の者はこの時期、誰もがまさ
 に先の見えないトンネルの闇の中にいるような気持ちに陥りま
 す。なぜなら、それまでとは全く違う環境で、睡眠不足の中、
 日々新しい公務(執務)に就かねばならないからです。

永平寺に入山した者は皆、最初に「鐘酒しやうしゅ」と呼ばれる寮(部
 署)に配属されます。ここは、鐘や太鼓等の鳴らし物を行じて、
 時間や行持の進行状態を知らせる所です。修行僧は皆、その鳴
 らし物の打ち方や回数を聞いて、時間を始めとしたさまざま
 情報を得るのですから、間違いは許されません。そのため前日
 の夜に担当者が決まり次第、個々に担当する翌日の鳴らし物の
 予習をします。しかし実際は、緊張のあまりタイミングを外し
 打ち損ねたり、回数を間違えたりすることが時折起こります。
 当然厳しい注意を受けますが、その後自分の打った一つの鐘の
 音で、全山が動くのだから決して疎かにできないことが分か
 ります。後々鑑みると、本格的に永平寺の修行が始まったのだと
 自覚する時節が、この弥生の月なのです。



大本山總持寺



被災地を見守る「平成の救世観音」

今月であの悲しい東日本大震災から丸二年が経ち、早くも三回忌を迎えます。總持寺では鶴見区文化協会のご協力をいただいて九日（土）に大祖堂で「祈りの夕べ」と称し、歌手で浄土真宗の僧侶・やなせなな師と福島県安積黎明あさかれいめい高校合唱部による震災復興祈念演奏会を開きます。当日は横浜に一時避難されている方がたをお招きし、鶴見の皆さんと共に犠牲者の冥福と被災地の日も早い復興を念じます。

また、仏殿横の観音像が三宝殿近くの高台に移転し、宗教学者・山折哲雄氏の命名で「平成の救世観音」として生まれ変わりました。そして遙か数百キロ先の被災地を向いて見守ります。瑩山禅師に「今年より八幡の神の現れて、我が立つてま柚の守まほとなるかな」という一首があります。柚とは樹木の茂る山です。この歌は梅花流でお唱えしますからご存じの方も多いでしょう。この救世観音像が被災地と人びとの「柚の守」になるならば、こんなに素晴らしいことはありません。ぜひ皆さまも「祈りの夕べ」にご参加され救世観音像にお参りくださいませようご案内申し上げます。また、十一日には震災犠牲者の慰霊法要を厳粛にお勤めいたします。その他「両大本山主催の復興祈願桜プロジェクト」がいよいよ被災地へ桜の苗木を届ける段階となります。皆さまからの「ご支援」ご協力をよろしくお願い申し上げます。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

太棹の雪の音締めとなる口説き

東京都 伊奈 三郎

評 淨瑠璃、雪の道行き。太棹（三味線）の撥の高音はいよいよ極まり手到手を取り落ちていく口説き（さわり）の場面。男の誠、女の誠を押し通し心中となつていく江戸時代の世話物。投稿ハガキに九十二才とある。若き頃の血潮のひたむきさは今も変わらないのだろう。

コップ酒決に漁師の針供養

広島県 岡村 憲諮

評 一般には二月八日に行われる針供養。その日はよく働いて折れ曲がつた裁縫針を淡島さまなどに参詣し納める。漁網などもまた漁師の感謝の心に、供養が行われる。コップ酒が漁師の心意気や浜の様子を想像させる。

◆ うつすらと埃のやうな冬の鬱 東京都 長谷川 瞳

◆ 神渡し逆巻きて波来たりけり 島根県 藤江 堯

◆ わたつみの音の更けゆく星月夜 北海道 大野 節子

◆ 身の丈に生き相伝の紙を漉く 大阪府 柏原 才子

◆ あつたかな日なり師走のガラス拭く 埼玉県 日尾野安子

◆ 菩提寺の畳を拭きて師走かな 山形県 寒河江富子

◆ 浮き灯台鬼波に躍る神渡し 秋田県 小田篤恭葉

◆ 電師の雪達磨ある病院に 東京都 斉藤ハルエ

◆ 断捨離に徹する整理年の暮れ 埼玉県 小林 茂之

◆ 結納へ着物の雪を払ひけり 東京都 野村 信廣

*選者吟

運針の指美しく春炬燵

五灰子

*作句小見

写生に徹するあまり報告になつたりします。そのことに何を感じたかを五七五にします。ふと思つたことでもいいのです。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

サザエさん一家のごとしまたひと日泣きて
笑いてわがハセガワ家 東京都 長谷川 瞳

評 長谷川町子原作の四コマ漫画の「サザエさん」に作者の家庭を重ねている。作者も長谷川さんである点が味わい所である。漫画のサザエさん同様、ユーモアたっぷりだが「泣きて笑いて」でベーンソスが生まれた。

次兄より野菜届きて小松菜に「菜々美」と
いう名あることを知る 茨城県 太田 弘美

評 「菜々美」とは小松菜の品種名なのだろうか。生産者の小松菜に注ぐ愛情と野菜のおいしそうな感じをよく表している命名だ。一首は気付きのきっかけに兄を出して効果的。

◆ 逝きし子と柿を擁ぎたる日もはるか熟柿をつつく小鳥見
てをり 鳥根県 奈良 正義

◆ 百四歳の媪を葬る寺庭に清しく枇杷の花の香匂ふ
宮城県 荒川 庄助

◆ 裏畑に取り残したる芭蕉葉に霜降り光る今朝の冷え込み
岩手県 池田 眸

◆ ひっそりと夕映えにたつ古民家の障子にかるくゆらぐも
みち葉 愛知県 國定 淳子

◆ テーブルにさまざまの傷残りをり四人の子らの坐りぬし
場所 北海道 池田 雨郷

◆ 愛車今日廃車となりて引き取られいよいよ狭し夫の余生
は 兵庫県 前田あつ子

◆ 歳晩の庭の陽溜まりに老夫婦背中まるめて草をひきおり
山口県 縄田 文人

◆ 今宵また年齢確認させられてビールをもらうコンビニの
レジ 東京都 野村 信廣

◆ 朝明けの風を乗り出す夫婦舟刺網たぐるたつきの姿
岩手県 関合 新一

◆ 寒き冬耐えつつ春咲く花の芽を養っている裸木を見る
長野県 宮本美代子

*選者詠

菱沼の力石とぞ蛇石とぞ注連縄張られ神さ
びており ちづ

*作歌小見

短歌は一瞬の思いをのせるのに効果的な詩型ですが、奈良さんの作品には長い時間が感じられます。「はるか」の言葉の所為ではなく、柿をモチーフに下句への繋げ方が巧みだからです。拙歌は産土の神に新年のお参りをした折の歌。